

子どもの学習意欲を高める 働きかけとは？

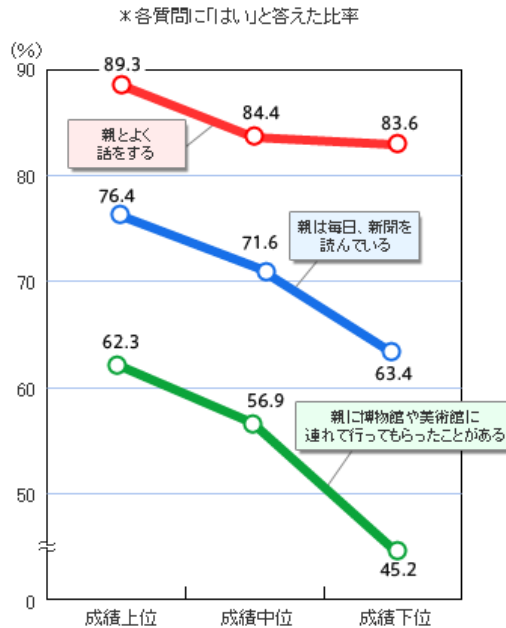
「補習校の学習スタイル確立を！」
「第2の担任 養成講座？」

参考：「学習基本調査・国内調査報告書 小学生版」
「子ども生活実態基本調査報告書」
Benesse教育研究開発センター



小学校の授業に興味をもってみる

図1 親の行動と成績の相関 (小学5年生)



出典: Benesse教育研究開発センター
『第4回学習基本調査・国内調査報告書 小学生版』

学校新聞でもお知らせしたように2007年10月に文部科学省が発表した全国学力・学習状況調査の結果からも、「家の人と学校での出来事について話をする子どもほど、学力調査の平均正答率が高い」という調査報告がなされています。

親子のコミュニケーション頻度、保護者自身が社会の出来事に興味をもつ姿勢、家族との体験活動の有無と、子どもの成績との間に深い相関関係があるようです。

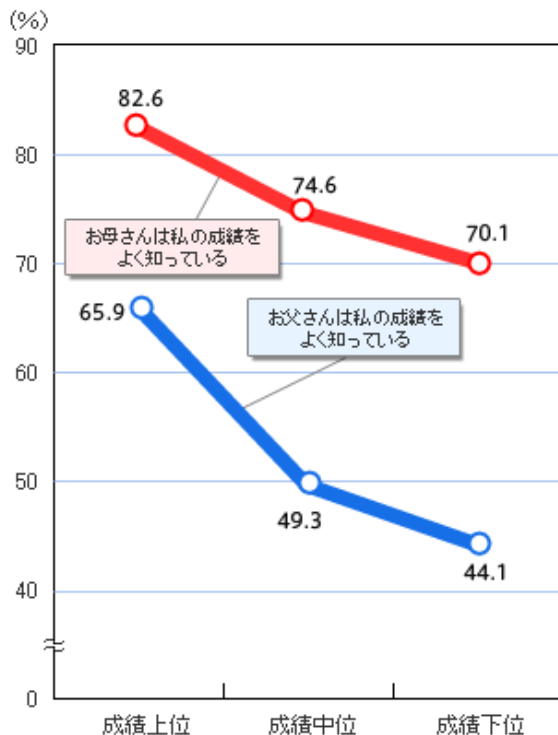
補習校での学びやお子様の国語学習の様子に興味をもってみることは、家庭での子どもたちの学校での学びを広げるような雰囲気づくりや働きかけにつながるのではないのでしょうか。

毎日の生活、学校で起きたことなどご家庭で話が交わせるように是非心がけてください。一番身近で、構えず取り組める上に学力にも良い影響がみられるようです。

成績の「中身」も気にかける

図2 親の成績把握状況と成績の相関 (小学5年生)

* 各質問に「はい」と答えた比率



出典: Benesse教育研究開発センター
『第4回学習基本調査・国内調査報告書 小学生版』

成績の“中身”～つまり、お子様がどんな学びの様子なのかを知ることでも学力に良い影響を与えているようです。(一緒に過ごす時間の長いお母さんの役割は特に大きいのかもかもしれません。)

学齢によっては、成績“中身”、を知るだけではなく、子どもの勉強に直接かかわることも大切になります。

特に、低学年のお子さんについては、保護者が横について勉強をみたり、分からないところをともに考え学習をしていくことは、とても大切です。

そして、なるべく良いところをほめながら、気になる点(字が汚いなど)のアドバイスを加えていくと良いのではないのでしょうか?一緒に学習し、認められることで、子どもたちは「がんばろう」という気になっていくはずです。

学齡があがっていくと...

- 保護者の皆さんが忙しかったり、高学年になってきたりすると、勉強をみてあげることがだんだん難しくなる傾向があります。ついつい「宿題は！」といった声かけも増えるのはこの頃でしょうか？
- 子どもの頃に習ったやり方と違ってどう教えていいか分からなくて...という話も耳にします。
- そんなときでも、できるだけ子どもと一緒に考え、学校の先生への質問をアドバイスしたり、調べ方を教えたりしてあげると良いと思います。
- 4、5年生を境目に現地校との両立も厳しさを増してくるようです。「勉強なさい！」の一言だけでうまくいかないときも多いと思います。知恵を絞って両立をはかるための工夫が必要となってきます。

☆心当たりはありませんか？

- 子どもたちの様子を見ていると、つい「勉強しなさい」と言いたくなってしまふのが常。

(補習校に通う子どもたちは、両立で苦勞していますが...)



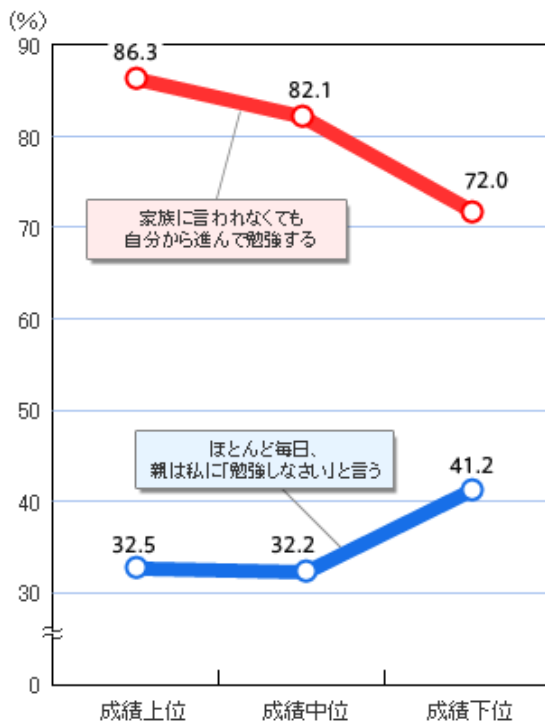
- 「今やろうと思っていたのに...言われるとやる気なくなるんだよね。」そんな返答が子どもたちからは戻ってくるのではないのでしょうか？
- さらに、一緒に勉強をしても、飲み込めないでいるお子さんを目の前に「**何でわからないの！**」と声を荒立ててしまったことはありませんか？すったもんだの末、「**勝手にしなさい！**」という結末....。
- 折角、家庭での学習を促そうと思っても逆効果になっていきます。

ひとつ小言を言うなら、あたつほめる

図4

「勉強しなさい」と言うことと成績の相関 (小学5年生)

*各質問に「はい」と答えた比率
(■は「あてはまる」「まああてはまる」の合計)



出典: Benesse教育研究開発センター
『第4回学習基本調査・国内調査報告書 小学生版』

何と成績下位層の児童の40%以上が、毎日保護者から「勉強しなさい」と言われているそうです。

子どもにとっては、小言を言われれば言われるほど、子どもは勉強への意欲を失うことにつながり、さらには家庭学習を嫌がるようにもなります。

勉強自体や補習校で学ぶ国語、日本語を嫌いになってしまつては、事態はさらに“深刻”です。

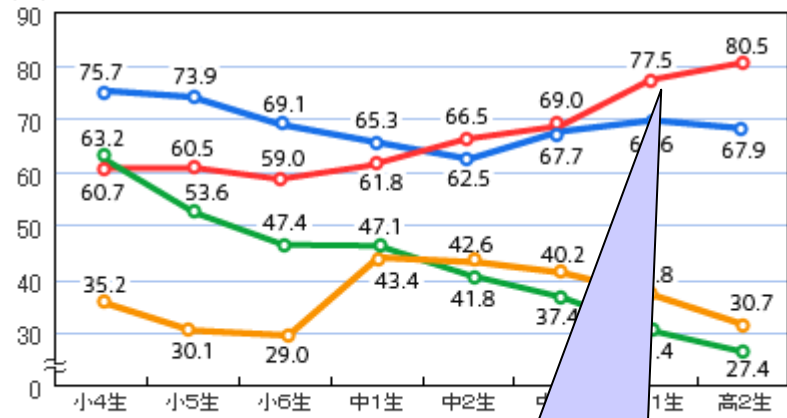
家庭での学習は、親子の関係もあって、褒めながら進めることが難しいという話をよく耳にします。そこは、お子さんのために堪え所！その効果を考えた場合、やはり標題のように「**ひとつ小言を言うなら、あたつほめる**」ことが大切です。その繰り返しで、勉強好きになり、自らから進んで勉強する姿勢が身に付けばしめたものです。

高学年からは将来についても話し合う ～何で勉強するの？何で補習校に行くの？～

図5 勉強する理由 (学年別)

- 成績が良いと親がほめてくれるから
- 成績が悪いと親に叱られるから
- 問題が解けるとうれしいから
- 自分が就きたい仕事に就くのに必要だから

(%) 「とてもそう」+「まあそう」の%



出典: Benesse教育研究開発センター 『第1回子どもと親の対話調査報告書』

年齢が上がるごとに、学習に対する動機づけがしっかりしているほど良い影響を及ぼしているようです。

子どもの意欲を高め気持ちを勉強に向かわせるための“働きかけ”は、子どもの成長、学齢によっても異なります。

低学年のうち、親のいうことを従順に聞いていても大きくなるに従って「何で勉強しなくちゃいけないの？」といった問いかけを受けられることでしょう。



補習校の場合は、苦勞している現地の学校に加わることで、「何で補習校に行かないの？」といった問いかけも投げかけられているのではないのでしょうか？

なぜ、補習校に通うのかも明瞭になっていることが勉強への意欲にもつながってくると考えています。

ご家庭：「第2の教室」 でもできる音読の方法

「第2の担任 養成講座？」

パートⅡ

楽しく音読に取り組みましょう

● 「第2の教室」でもできる音読色々

- 音読の方法にはいくつかやり方があります。音読自体は、本を声を上げて読むという単調な学習とも言え、子どもが意欲を持って持続するためにはそれなりの工夫も必要です。
- 保護者の皆さんにも、ご家庭で第2の先生として子どもたちにご指導頂くための参考にいくつかの例を紹介してみましよう。



まずは、目当てを決めて読んでみよう！

- ただのんびんだらりと音読をするのではなく、
「今度は、大きな声ではっきり読んでみよう。」
「つかかからないで読んでみよう」
「どこまでつかえずに読めるか挑戦してみよう。」
「会話のところは、雰囲気を出して読んでみよう。」
- 目標を決めると子どもの気持ちも変わります。
- 読み終わった後の、“一言”（褒め言葉やアドバイス）
これが次につなげるためのポイントです。
- 目当てを伝えていながら、それに対するコメントがないのは折角の取り組みの効果を無くしてしまいます。

いろいろな音読の方法

- **追い読み** 「先生が先に一文を読みます。同じ文を、後に続けて読んでみましょう。」
- **交代読み** 教室でお馴染み“まる読み”～親子、兄弟交代で兄弟や近所の友だち？だけで聞きあって完結するので時間のない保護者の皆さんへは有り難い方法？とはいえ、それに甘んじるのは厳禁！です。
- **場所変え読み** 「1回目は前を向いて、2回目は横向きで・・・」など色々応用をして「1回目は、お母さん2回目は、お父さん...」とか
- **たけのこ読み** 先生がお手本を読み進めているときに好きなところだけ立ち上がって読む音読
- **確かめ読み** マーカーなどを用意して読めない漢字や意味の分からない所に印を付けながら音読
何色かマーカーを用意して、日にちをおいて色を変えて確かめてみてはどうでしょう？



チャレンジ系？で楽しく音読

- **完璧読み** どこまで正確に読み進められるか挑戦
読めたところを日付とともに記録をしておくで挑戦の楽しみがわいてくるものです。
- **なりきり読み** 登場人物になりきれるか挑戦
特に低、中学年のお子さんは、上手になりきっていたときに一言を添えると“その気”になりますね！
- **早読み？**
すらすら読めるようになったら、やたらと早く読むことに挑戦するなんて方法もあります。ストップウォッチを片手に挑戦するのも楽しいものです！
 - ☆「ここからここまで何分でよめるか挑戦しよう」
 - ☆「1分間でどこまで読めるかやってみよう」



音読に親しんで...

- 「音読をしなさい」という声かけ以外に、こうした目当てや工夫を加えることでバリエーションも広がります。第2の教室を充実させる一工夫としてお役立てください。
- **やっぱり、ここがポイント** → 小さいお子さんの場合は、できるだけそばで聴いて、終わった後に一言“ほめ言葉”（時にはアドバイス）を添えてあげることが何よりも重要です。
- 遊びの要素も多い“早読み”や“完璧読み”は子どもも大好きでした。ただ、これをするにはそれまでに充分音読をし、スラスラ読めることが必要でした。
- 補習校で配布される他教科の教科書も大いに活用しましょう。
→特に、高学年、中学生にとっては、家庭や友だちとの会話でお目にかかることの少ないいわゆる“学習言語”に触れる大切な機会にもなります。
→国語以外の科目に興味がある児童・生徒にとっては取り組みやすさがあります可能性もありますね。

おまけ編

～ Q&A ～

皆さんも一緒に考えてみてみましょう！

参考：読み聞かせの持つ“大きな力”



おまけの [問題]

- **6年生の我が子が宿題の計算ドリルを一生懸命やりました。あなたの行動は次のどれに近いですか？**
- A 自分で丸付けをさせる。その後、間違っていたところを直させて、できたら丸を付けてやる。そして、がんばったことを褒める。
- B 親が丸付けをしてやる。その後、間違っていたところを直させて、できたら丸を付けてやる。そして、がんばったことを褒める。
- C 「全部合っているといいね。6年生になって、しっかりしてきたね。これなら、中学でも大丈夫だね」と言って、大いに褒める。
- D 「よくがんばったね。お父さんが帰ってきたら、お父さんにも見てもらおうね。お父さんも喜んでくれるよ」と言って、大いに褒める。

正解は、AとB

- 問題を解いた後、すぐに丸付けをすることがとても大事です。一生懸命やった直後にその正否を確認することで、記憶に深く刻まれるからです。

追記

学校でも、問題をやり終えた子どもたちは、「先生、見て。」と我先にできた問題を見せにきます。子どもにとっても、その場で確認をしてあげることは、やはり重要だと考えられます。そして、その場で確認をすることが学習を深めていくことにつながると思います。

Aを選んだ人：◎「即時確認の原理」

- 直後の丸付けで、丸がたくさん付くと、大きな達成感を味わうことができます。これがやる気につながります。
- また、直後の丸付けで、自分が正解と思い込んでいたものがバツと分かったときはショックが大きくなります。ですから、次に間違えなくなるのです。
- 時間が経てば経つほど、これらの効果は目に見えて薄くなります。このことを、教育心理学では、「即時確認の原理」と呼んでいます。



Bを選んだ人：◎

- 6年生は中学生に近くなっているので、だんだん自分で丸付けができるようにしていくことも大切です。でも、これも子供によりけりです。
- 6年生でも、まだ親がつけてやった方がいい子もいるのです。6年生だから自分でつけさせるというのではなく、我が子の状態によってやり方を決めることが大切です。半分つけてやって、残りを自分でつけさせるなどの工夫で、少しずつステップアップするということも考えられます。
- いずれにしても、〇年生だからというのではなく、我が子の状態に合わせることが大切です。ですから、これも◎です。

☆ “親力” で著名な 親野智可等さんのアドバイスは...

- 子供が宿題をやったら、できるだけ早く親が見てやってください。中身をしっかり見てやって、がんばったことを褒め、足りない点を指摘してやってください。こういうことをしっかりやっているのといないのとでは、子供の意欲は全く違ってきます。
- 中には、宿題の丸付けは先生の仕事と考えている親御さんがいると思います。それは先生の仕事で、それで給料をもらっているのだからと。だから、私は、子供の宿題に丸を付けないのだと。
- 私は、その考え方は損だと思います。なぜかと言えば、一つも我が子のためにはならないからです。我が子を伸ばすにはどうするかという視点で考えた場合、上記のAやBがいいのは明らかです。

参考：読み聞かせの持つ“大きな力”

- 読み聞かせは、小さいお子様向けのようですが、意外と秘めた“力”を持っています。小学校でボランティアの方がしてくれた教室での読み聞かせに食い入るように高学年の児童でもその世界にひたっていた姿を目にしてきました。また、幼い頃、母が寝床で読み聞かせてくれたその様子は、読み聞かせてもらった話以外に、心の中へも何かを残してくれているようにも思います。ご紹介した音読以外に「読み聞かせ」を大切にしたいと願っています。
- 読み聞かせは、“読書好き”への第一歩。
- 読み聞かせは、読み手と聞き手で共有する感覚が特別です。しかも、本の世界の楽しさを味わえます。親子で、描かれた世界について会話がすすみ、世界が広がる可能性もあります。
- 特に、読み手が、心底好きな本を読み聞かせる時には、言葉にその気持ちも盛り込まれ、読み手の持つ感動を聞き手のお子さんと共有することができるかもしれません。
- いろいろな本を活用しましょう。絵本も馬鹿にできません。小学校の高学年でも熱心に絵本の読み聞かせを聞くものです。他教科の教科書の活用も良いですね。
- 身の回りの環境を整えましょう。読んで欲しい本や絵本をできるだけたくさん家におくようにしましょう。それだけでも、手に取る可能性が高くなります。
- お父さん、お母さんも是非、お子さんに読み聞かせを…。最近目にした実践では、高校生が小学校に読み聞かせをする方法もありました。



一部「親力」より引用

☆家庭は第2の教室、保護者は第2の担任

- 「家庭は第2の教室、保護者は第2の担任」という補習校関係者の中で語り継がれる言葉があります。このことは、頭で理解はされていても実際の大変さは一言では言い表せないものがあると思います。また、現地校と補習校を両立される子どもたちの苦労も計り知れません。家庭での学習と補習校での学習が両輪となって、子どもたちの学びが確かなものとなることを願っています。

